

<新刊紹介>横手一彦著『被占領下の文学に関する基礎的研究』資料編・論考編

西尾, 雅裕 / ニシオ, マサヒロ / NISHIO, Masahiro

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

113

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019906>

横手一彦著

『被占領下の文学に 関する基礎的研究』

資料編・論考編

西尾 雅裕

横手一彦氏の『被占領下の文学に関する基礎的研究』の資料編と論考編が武蔵野書房から出版された。戦後五十年が喧しく言われた昨年から今年にかけて社会を揺るがす大きな事件が次々と起こり、あらゆる領域における「戦後」的なものが崩壊する中で、戦後の見直し、終焉・脱戦後が言われた。しかし、こうした問題は「戦後日本」という狭い枠内では到底考えうるものではない。本書は単に敗戦期におけるGHQの検閲の実態を明らかにしただけのものではなく、一九四〇年代を基点におき、現代まで続く近代日本文学の〈歪み〉を、他に類を見ない豊富な資料と独自の調査から実証したものである。

まず資料編では、GHQのSCAPによつ

て検閲を受けた文学作品の復元版が掲載されており、その中には川端康成、石川達三、太宰治、永井荷風、中野重治や小田切秀雄など様々な作家や評論家の著作があり大変貴重である。また、検閲を受けた文学作品、書籍も年代順に一覧表にされており、その膨大な量と多岐に及ぶ検閲の実態が見事に明かされている。横手氏は「基礎的研究」と謙遜されているが、実際にアメリカまで足を運んでのこうした一次資料の収集と整理には膨大な時間と労力が必要であり、こうした堅実な仕事は現在の作品論に傾倒し観念の領域に閉塞している文学研究に一考を与えるものであろう。

続く論考編では、まず研究姿勢として敗戦期の「異国民の軍隊による間接支配が、人びとと日本の文学にどのような影響を与え、それが今日どのような変貌した様相となったのか」ということがあげられている。被占領下の研究であると同時に現代とも涉りあつて行くというスケールの大きなものである。この点については、その後の日本文学の性格に大きく影響した一九四〇年代の日本文学を、従来の「抑圧と解放」という視点から「抑圧から抑圧」へと変えて置く新たな試論が提出されている。具体的には情報局からGHQへの

権力（性質は違うが）の中断のない移行、さらに「大東亜戦争」から「太平洋戦争」という呼称の強制的変更等による歴史観の変容などをあげ、敗戦期の文学および精神史の明暗表裏を暴き出し、その後の日本文学の〈歪み〉の根源にも論及されている。この横手氏の試論は非常に重大であり、紙面の都合で本書の全体について言及できないが、我々が避けて通ることのできない問題である。

最後に少し私的な回想を述べさせて頂く。今はもう取り壊されてしまった西陽の当たる懐かしい大学院棟の専攻室で、横手さんはいつもサンダルを履いて、専攻室と図書館を夜遅くまで往復する、その住人といった様子であった。そして机の上にはいつも資料が山積みであった。よく一緒にさせてもらったお酒の席で横手さんがしみじみと「ダイナミックな仕事があった」と言っていたのを思い出す。それが今、見事に結実したのだ。

（にしお まさひろ・一九九〇年大学院修了）

▽一九九六年武蔵野書房 各三八〇〇円

△著者〳長崎総合科学大学教授